

期は、合図も送ることなく、戻ることもなかった。

道端にひざまずき、「兵隊さんは国を守ってくれる神さまだ」と手を合わせるおばあさんの姿が頭から離れなかった。機体が故障しても部品不足で修理もままならない状況だったが、白飯が食べられるなど特別な待遇を受け、どんな命令が下ろうとも「やらないとあかん」を腹をくくった。

その後、第66戦隊は福岡県の大刀洗飛行場に移駐したが、既に制空権は奪われていた。米軍機から機銃掃射を受け、田んぼに飛び込んだこともあった。空中戦で日本軍の2機が撃墜される場面も目撃。飛び立っていった兵士はほとんど帰ってこなかった。

8月14日夕、翌朝の出撃が伝えられた。特攻隊員ではなかったが、上官からの命令は「特攻だ」。自然と死を受け入れ、遺骨代わりに髪の毛や爪を封筒に入れ、両親に宛ててはがきをしたためた。

「前略、これが最後の便りになり

ます。今度こそ、生きて帰ることは難しいかと思われます。何の親孝行も出来ず申し訳ありません」

寝られないまま日付を越えると、出撃中止の命令が下った。正午の玉音放送は雑音ばかりで何を言っているか分からず、数時間後に「戦争は終わった」と知った。やり場のない感情が爆発し、叫びながら竹やぶで日本刀を振り回した。「情けなかった」。翌日には、指示を受け機体から外した通信機を池に沈め、使用していた暗号表は燃やした。

実家に帰ると、仏壇に「遺書」のはがきが立てかけてあった。両親は驚きながら喜んで迎えてくれた。その後、自衛隊の前身の警察予備隊から誘いがあつたが、「もう戦争はごめんだ」と断り、就職した鉄鋼会社で定年まで勤めた。

「僕らは消耗品だった。特攻は最たるもので、本当にむごたらしい作戦だった」と振り返る各務さん。戦死した仲間への後ろめたさは、消えることはない。「戦争は二度と起こしてはならない」